

文学的文章の確かな読みの力に培う複数教材活用による授業の在り方(第一年次) —学習者の「読みの方略」概念を視点とした授業づくりを通して—

長期研究員 宍戸 和博

I 研究の趣旨

文学的文章の「読むこと」の指導は、読む能力を高め、自力で読み進める力の育成にあると考える。それには、目的に応じて効果的に読む力を高めていく必要がある。だが自分の実践を振り返ると、教科書教材の読解が中心となり、子どもの読みは、その教材だけにとどまっていたように思われる。そのため、身に付けた読み方がその後の子どもの読書行為につながるものが少なかった。そこで、複数の教材を効果的に位置付け、教材間につながりを持たせることで、自分で読み進める力の育成に資する学習の在り方を探ることを本研究の目的とした。

II 研究の概要

1 研究仮説

文学教材の指導において、教材の構造等から有効な「読み方」を明確にし、「読み方」を視点とした教材間の関連付けを工夫することで、学習者に「読み方」を「読みの方略」として機能させることができれば、確かな読みの力の育成につながるであろう。

2 研究内容と実際

(1) 確かな「読みの力」育成に向けた授業構想

① 「読みの方略」について

ある教材で得た「読み方」を他にも使えてこそ、読みの力がついたと言える。ただし、読み方の指導では、技術のみの注入や訓練自体が目的化することは問題視されるべきである。そこで、子どもの側からの改善を図るために、「方略」という考え方に着目した。学習における方略とは、辰野千壽によれば「学習者が学習の効果を高めることをめざして、意図的に行う心理操作あるいは活動*」と定義される。本研究では「読みの方略」を、登場人物の設定や場面展開・構成、表現など教材の特徴に応じ、読み手が自己の読み方を使って効果的にアプローチし、

理解を目的として行う手続きや思考の仕方ととらえた(図1)。方略指導において重要な点は、子ども自身が読み方の有効性を

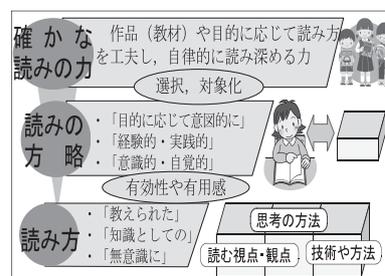


図1 方略の位置付け

感じながら読むことにある。そのためには、状況や目的に応じて読み方を主体的に活用し、意図的に方略として機能させる具体的な場面が必要となる。

※ 辰野千壽 (1997) 『学習方略の心理学』 図書文化社

② 「読みの方略」育成のための複数教材の活用

1 単元内で複数教材を読む活動は、主に教材文読解後に発展読書として位置付けられることが多い。しかし、子どもが教材文と読書活動にどんなつながりを持ち、どのような力を生かして読めばよいのか分からないと、ねらいの定まらない読書に終始してしまう。そこで教材の特性と子どもの実態から身に付ける読み方を焦点化し、方略として機能させることをねらいとして関連付けていくことが大切であると考えた。方略が機能する場として下の二つの関連(図2)を想定し、単元の中に段階的に位置付けた。

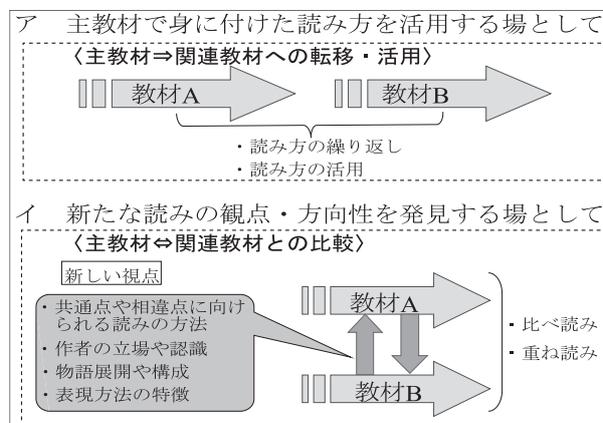


図2 方略の育成を視点とした教材の関連付け

③ 「読みの方略」育成を視点とした単元構想

第5学年の「注文の多い料理店」を主教材(共通

教材)とし、身に付けさせたい読みの力に応じて、関連させる教材を変えた単元を二つ構想した(図3)。

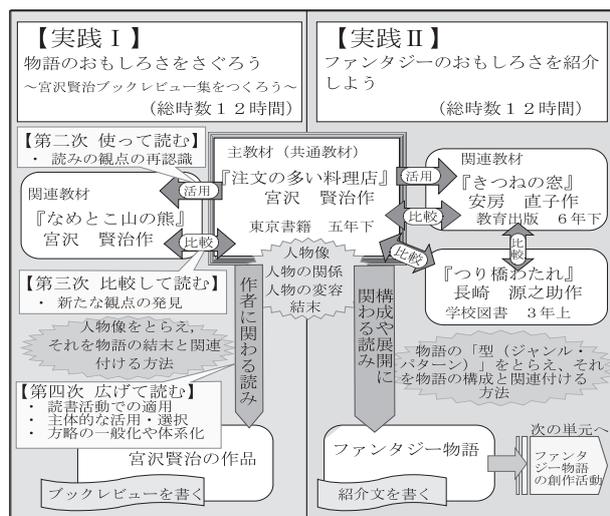


図3 複数教材活用による単元の構想図

(2) 検証授業の実際

構想を基に、別々のクラスで授業を展開した。

【第一次 読み方を知り、獲得する段階】

主教材の構造やプロットに応じて、主教材の読み方を身に付ける段階。「中心人物の人物像」「人物の関係」「中心人物の変容」に焦点化し読み進めさせた。その際「登場人物マップ」を活用し、人物を中心に物語の構造を視覚的にとらえやすくすることで、人物に焦点を当てた読み方を意識させる手だてとした。

【第二次 方略として使い、読み進める段階】

第一次で身に付けた読み方を活用して読むことで、方略としての有効性を認識する段階。実践Ⅰは『なめとこ山の熊』、実践Ⅱは『きつねの窓』を自力で読み進め、方略としての活用を図った。その際も「登場人物マップ」にまとめさせることで、読みの観点を焦点化し、意識的に活用させた。当該学年よりも上学年の教材を位置付け、自分で読めた有用感を実感させることで方略として認識することにつながった。

【第三次 新たな読み方に気付き、読み深める段階】

主教材と関連教材を比較することにより、一つの教材では気付かない読みの視点に気付く段階。実践Ⅰでは、中心人物の「狩猟」という行為を軸に共通点や相違点を読むことで、人物像と結末の在り方に着目させた。既存の物語展開との違いから、「なぜ、作者はそのような結末にしたのか」という視点が生

まれた。実践Ⅱでは、「鉄ぼうを取り上げる」行為を軸とし、「中心人物の変容」「人物の関係」という視点から二つの教材を読み返すことで、読みの深化を促した。さらには、『つり橋わたれ』との3作品で比べることで、ファンタジー作品の構造という新たな読みの視点に目を向けさせることができた。

【第四次 方略の一般化を図り、読み広げる段階】

読書活動に広げ、目的に応じて広く適用する中で、方略についての認識を体系化する段階。実践Ⅰでは、同じ作者の物語を読むことで「中心人物像と結末を関係付ける読み方」、実践Ⅱでは、ファンタジーの構成や展開を読むことで、「『現実-非現実-現実』の型と物語構成を関連付ける読み方」を方略として認識させることをめざした。これまで学習した観点を基に、目的に沿って主体的に読み進め、自分で選択した本を自力で読むことができた満足感や多くの本に適用できる有用性を感じさせることができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

読み方に焦点化し教材間の関連を図ることで、子どもに「読み方」を方略として機能させることができた。主な要因として活用する場を設定し、繰り返し使用させたことで、子どもに意識的な活用を促すことが可能となったことがあげられる。段階的に多読に広げることで、目的に応じて主体的に読み進めることができるようになった。また比べることで共通点・相違点が思考の切り口となり、教材を相対的に位置付けて意味や特徴をつかんだり、相互に関連付けて読んだりする力の育成にもつながった。実践を通し、適切な関連教材の位置付けにより子どもに新たな視点を獲得させ、主教材の読みに深まりや広がりを持たせることが可能となることが分かった。

2 今後の課題

方略の構造や系統を整理し、さらに焦点化することで授業への汎用化を図る必要がある。また、方略はメタ認知的理解力の向上を要するが、小学生の場合、個人内での気付きには限界がある。そこで「読み方」や「方略」を視点とし、それぞれの読みの過程を交流する授業の在り方も探っていきたい。